

活字は安らぎ・希望

第18回東京国際ブックフェアが7～10日、東京・有明の東京ビッグサイトで開かれた。電子書籍関係の出展社が昨年の倍近い150社に増える一方、東日本大震災を機に見直される「本の力」や、図書館、書店の機能を考える催しが目立った。(文化部 多葉田聡)

電子書籍のコーナーには、新たに参入を表明したパナソニックを始め、NEC、KDDI、中国の方正などの端末を展示するブースが並んだ。「電子書籍元年」と騒がれた昨年、来場者があふれた反省を踏まえ、各ブースの面積を拡大したが、出版社のブース以上にぎわいを見せた。また、ソニー、グーグルなどの担当者が最新事情を語り合うセミナーなど、様々なイベントが行われた。総来場者数は昨年を1000人以上上回る約8万9000人に達し、過去最多となった。

一方、講演やシンポジウムでは「本の力」を改めて見直す発言が相次いだ。初日に基調講演を行った作家の大沢在昌さんは6月下旬に新作PRで東北の書店を回った体験から、「被災地では本が売れている。震災後、小説のような絵空事は読まれなくなると思ったが、安らぎを取り戻し、明日への希望を持つ材料として活字が役立っている」と話した。復興支援をテーマにしたシンポジウムでは、宮城県気仙沼市教委の白

東京国際ブックフェア



「本の力」見直された震災後

幡勝美教育長が、3月末に再開した図書館に多くの市民が訪れているとして「本が心の支え。図書館の役割は大きい」と強調。仙台市民図書館の司書、平形ひろみさんも、被災した館内から本を持ち出して「青空図

書館」を開設したことを紹介し、「本がどれだけ求められているか実感している」と話した。岩手県宮古市の書店主、山崎秀男さんも「津波で本屋がなくなった地域からバスで2時間ほどかけて買いに来てくれる。震災写真集は500冊が3日で売り切れた」と話した。他方で、福島県在住の作家、玄侑宗久さんは同県内の自殺者が増加したことに触れ、「本を読みたい人が

①大勢の来場者でにぎわった電子書籍端末の展示ブース②震災復興支援のためのチャリティーコーナーも設けられた



死ぬはずはない。3月時点では避難所でも本を読んでいたが、今の状況は岩手や宮城と異なるのかもしれない」と長引く原発事故の影響を指摘。原発事故や放射能について膨大な情報に氾濫したことで、「正式な発表さえも信じられない、言葉の価値の暴落が起きた。この状況を踏まえた言葉が出てきてほしい」と述べた。「いま改めて書店について考える」と題したシンポジウムでは、モノ(品ぞろえ)、ハコ(空間)、ヒト(人材)、コト(イベント)という4つの視点から議論。アマゾンなどのインターネット書店や電子本を配信する電子書店が存在感を増す中、「見落としていた面白い本を教えてくださいの本屋」(翻訳家の青山南さん)、「ネット検索とは違った深みのある書棚を持つ書店」(高野明彦・国立情報学研究所教授)など、リアル書店が生き残るためのヒントとなる意見が数多く出された。